

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32623

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770191

研究課題名（和文）日本人英語学習者と英語話者の相互行為における知識の共有：その過程と仕組みについて

研究課題名（英文）An Empirical Study of Knowledge-Sharing Practices and Mechanisms in Interactions between Japanese ESL Learners and Native Speakers of English

研究代表者

山本 綾 (YAMAMOTO, Aya)

昭和女子大学・人間文化学部・講師

研究者番号：10376999

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：日本人英語学習者と英語母語話者が会話のなかで、自分しか知らないことを相手にも知ってもらおうとする、相手しか知らないことについて聞き出そうとする営みに着目した。学習者と母語話者が初対面で行った二者間会話を資料として、談話分析・会話分析の方法を用いて、知識の提示や知識状態の管理に関する言語行動について量的・質的調査を行った。

その結果、学習者と母語話者が助言を求める／与える、相手の知識の状態を確認する、といったやりとりや、知識の正しさをめぐって交渉・調整を行う様相について、詳細に観察し記述することができた。さらに、そうした談話の構造的な特徴や、用いられる言語形式とその機能を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to explore how Japanese speakers learning English as a second language and native English speakers share their knowledge through face-to-face interactions. Dyadic conversations were recorded between learners and native speakers who were not familiar with each other. Methods of discourse analysis and the ethnomethodological approaches to conversation were used for qualitative and quantitative studies on several interactional practices related to knowledge sharing.

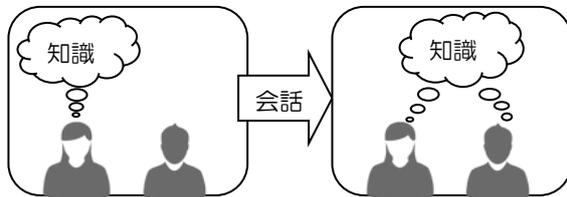
Close observation has illuminated that the discourse structures of the knowledge sharing practices and revealed the linguistic forms and their functions that are exploited in such practices. The results show how learners and native speakers seek and give each other advice, negotiate their epistemic statuses, and identify their information gaps about a topic at hand.

研究分野：談話分析

キーワード：相互行為 談話分析 会話分析 知識の共有 日本人英語学習者 英語母語話者 接触場面

1. 研究開始当初の背景

人は、言語を用いて他者から新しい知識を得るとともに、自分だけが知っている事柄を他者にも知ってもらえることができる。会話は、人と人が話し言葉によって知識を共有する営みと捉えられる (Clark, 1996、石崎・伝, 2001)。



では、母語や文化的な背景が異なる人の間の会話を、知識の共有という観点から眺めるとどのようなことが見えてくるだろうか。

日本では近年、職場や学校、地域社会など様々な場で異なる母語・文化を持つ人と接触する機会が増えている。異文化間コミュニケーションが日常化しつつある流れをふまえ、他者と違いを乗り越えて理解し合い、協働する能力が以前にも増して求められるようになってきている (塩澤・吉川・石川, 2010)。そうした社会的な要請を受けて、日本語を母語とし外国語として英語を学ぶ人 (以下「日本人英語学習者」) を対象として、異文化間コミュニケーション・スキルを向上させるための教材・カリキュラムの開発に、広く関心が寄せられている。

既に、日本人英語学習者の言語行動の特徴や会話に参加する際の課題について、様々な指摘がなされている。ただし、従来の調査では、筆記式の談話完成テストやロールプレイなど、仮想の状況下で引き出した資料が用いられることが多い。そのため、現実の会話の様相や学習者の言語行動の実態をどこまで正確に掬い上げているのか、という点で疑問が残る。実際の会話を記録し、言語行動を精密に観察する調査も進められているが、ここでは学習者と母語話者の共通点と相違点を探る、という比較・対照研究的な視座が中心となっているように思われる。

調査者はこれまで、日本人英語学習者と母語話者を対象として、両者の接触場面の会話を収録し、相互行為に関する調査を行ってきた。調査を通して浮かび上がってきたのは、何気ないやりとりに見えても、その中では多様かつ微細な交渉や調整が絶え間なく試みられている、ということだった。そうした示唆をふまえて、[会話＝学習者と母語話者の相違をあぶり出す状況]、という見方だけでなく、[会話＝学習者と母語話者の共同作業]、という見方も重要だろうと考えた。そこで、知識を分かち合うという普遍性の高い現象に着目して、学習者と母語話者の会話を分析する、という本研究の構想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、他者の理解や他者との協働を目

指す英語教育のための基礎的研究と位置付けられる。本研究では、知識の共有という観点から、日本人英語学習者と英語話者の間の相互行為を観察する。具体的には、学習者と母語話者それぞれが自分しか知らないことを相手にも知ってもらおうとする、相手しか知らないことについて聞き出すやりとりを中心に焦点をあてる。

取り組む課題は、次の2点である

- (1) 日本人英語学習者と英語母語話者が知識を共有する過程では、どのような言語形式が用いられるのか
また、その形式はどのような機能をになっているのか
- (2) 日本人英語学習者と英語母語話者が知識を共有する過程では、何が起きているのか

3. 研究の方法

本研究は、相互行為の社会言語学 (Interactional Sociolinguistics) の枠組みに基づくものであり、談話分析と会話分析の方法を援用している。特に、隣接応答ペア (Schegloff & Sacks, 1973)、成員カテゴリー (Sacks, 1972a, 1972b) という概念を適用した。

調査には、以下 (1) (2) から協力を得た。(1) 日本で育ち日本語のみを母語とする大学生 37 名、(2) 英語圏 (イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア) で育ち、日本で半年から 10 年以上にわたり就労している 7 名。

調査の手順は次の通りである。まず、学習者 1~3 名と母語話者 1 名から成るペアまたは小集団を作り、対面で会話を行ってもらった。会話をする時間は、各組約 20 分間とした。会話の話題や役割は指定しなかったが、使用する言語は英語のみと指定した。また、会話を始める際には双方が自己紹介をするようにと指示した。次に、発話を全て文字化した。続けて、知識の共有に成功および失敗した (と解釈できる) 事例を抽出した。そして、言語形式や談話構造、会話への参与の仕方などについて、量的・質的な検討を試みた。

なお本研究では、分析・考察の対象とする知識として、日本および英語圏の社会、文化、地理、歴史、言語に関する情報を取り上げることとした。これらは、異文化間接触場面において、話題にのぼりやすいと推測されるからである。また、英語の運用能力に制約のある学習者でも、ある程度正確に自身の意図を表現でき、会話が続けられる、という点も考慮した。以下、本研究で扱った知識の代表的なものを挙げる。

- 日本/英語圏に特有の規範
(例. 食事作法、交通法規)
- 日本/英語圏に関する百科事典的な情報
(例. 名勝、著名な人物・団体)
- 日本/英語圏での生活経験を通して得られる見解

- (例. 家電製品の使い方、教育制度の課題)
- 日本語／英語の語彙や文法
 - (例. 漢字の読み方、定・不定冠詞の用法)

4. 研究成果

上記「2. 研究の目的」で示した研究課題(1)(2)に沿って、得られた知見を述べる。

(1) 知識の共有を支える言語形式とその機能

日本人英語学習者と英語母語話者の双方が、会話の中で“Do you know ~?”という構文をしばしば用いていることが明らかになった。この構文は、日本や英語圏の社会や言語などについて、一定の知識が求められる話題の展開において現れることもわかった。会話の相手にとってなじみが薄いと予測される物事を会話に導入したり、難解だと思われる語彙を用いたりする際に“Do you know ~?”による問いかけが、事前の予告や事後の理解確認として働いていた。学習者と母語話者は、“Do you know ~?”が持つ事前予告および事後の理解確認という機能を活用して、相対的に知識の少ない相手に効率的かつ確実に情報を伝達しようと試みると考えられる。

(2) 知識を共有する過程で起きていること

以下の3つの現象が繰り返し観察された。

- ①「教える」－「教わる」という関係性の構築、
- ②「日本人」－「外国人(＝日本について無知な人)」という関係性の構築と解体、
- ③知識の正しさをめぐる対立と交渉、という3つである。①～③について概要を示す。

①「教える」－「教わる」関係性の構築

母語話者だけに見られたのが、助言という発話行為である。観光プランや英語の学習法、大学での学び方など多様な話題において、母語話者は助言を与えていた。学習者が助言を明示的に要求する事例も見られたが、特に助言が期待されていない場面で、母語話者が助言を与える事例も複数確認された。つまり、母語話者は学習者に対して積極的に助言を与えようとする傾向があると言える。

母語話者には、英語学習を支援する教師のようなふるまいもたびたび観察された。*English* という語が出現する頻度や位置を調査した結果、様々な話題の間を縫うようにして、英語の語彙・文法、英語の習得の困難さが繰り返し話題化されることがわかった。母語話者が英語の誤りを指摘・修正し、語彙・文法を説明し、学習を励ます、それを学習者が感謝とともに受けとめる、という構図が生み出され、「教える」－「教わる」関係が次第に固定化されていく様相が浮き彫りとなった。

②「日本人」－「外国人」関係性の構築・解体

英語について語る場合には、「教える／教わる」というカテゴリー対が芽生え、強化さ

れていくが、日本語や日本文化について語る場合は、そうした「教える」－「教わる」関係性がゆらぎやすい、という非対称性が示唆された。

学習者は、母語話者の日本(語)についての知識は乏しいはずだと想定して会話を進める傾向を示した(例. 和食の調理法、漢字の読み)。そうした想定を母語話者が受け入れ、自らを *gaijin* (外人) と称する事例が散見された。しかし、母語話者の方が、日本の文化や日本語についてより豊かな知識を備えている場合もあった。母語話者は日本(語)についての豊富な知識を披露したり、自らの体験談を語ったりすることによって、専門家としての権威づけに成功する。それを契機として、学習者と母語話者の間で新たな関係性が模索されることがわかった。

③知識の正しさをめぐる対立と交渉

学習者と母語話者の間で、知識の共有に至らない事例も見られた。一般に、会話参加者の間で知識にズレが生じると、相手に対する誤解や不信感が生じやすい。そうした場面では、それぞれが自身の知識の正当(統)性を真っ向から主張し合い、両者の間の対立が顕在化することもあり得る。ところが、本研究で収集した会話資料では、そのような競合的な談話展開はほとんど観察されなかった。

あからさまな対立に代わって見られたのが、母語話者の主導による、より複雑で暗示的な交渉である。例えば、ジョークによって笑いを交えながら学習者の知識の不備を指摘する、皮肉によって矛盾を暗示する、否定的な評価を下したあと直ちに当該の話題を終結させる、といったふるまいが確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 山本綾、英語母語話者と日本語母語話者の初対面会話にみられる“DO YOU KNOW ~?”：知識についての相互行為の分析、日本語用論学会第19回年次大会発表論文集、査読無、印刷中
- ② 山本綾、英語母語話者と日本語母語話者の初対面会話にみられる助言について、日本語用論学会第18回年次大会発表論文集、査読無、2016、223-226
- ③ 山本綾、日本人と外国人の英語会話における対人関係の構築—*English* (英語)をめぐりやりとりに焦点をあてて—、社会言語科学会第37回大会発表論文集、査読無、2016、126-129
- ④ 山本綾、談話を量的・質的に分析する：言語習得とエスノメソドロジーの観点から、学苑、査読無、第894号、2015、99
- ⑤ 山本綾、日本人と外国人の英語による初対面会話における関係性の構築—

Japan/Japanese (+NP) をめぐる相互行為の分析一、社会言語科学会第 35 回大会発表論文集、査読無、2015、92-95

- ⑥ 山本綾、英語話者と日本語話者の接触場面における誤解と不信および交渉、学苑、査読有、第 888 号、2014 年、13-23

〔学会発表〕（計 4 件）

- ① 山本綾、英語母語話者と日本語母語話者の初対面会話にみられる“DO YOU KNOW ~?”：知識についての相互行為の分析、日本語用論学会第 19 回年次大会、2016 年 12 月 11 日、下関市立大学（山口県・下関市）
- ② 山本綾、日本人と外国人の英語会話における対人関係の構築—*English*（英語）をめぐるやりとりに焦点をあてて—、社会言語科学会第 37 回大会、2016 年 3 月 15 日、日本大学（東京都・世田谷区）
- ③ 山本綾、英語母語話者と日本語母語話者の初対面会話にみられる助言について、日本語用論学会第 18 回年次大会、2015 年 12 月 5 日、名古屋大学（愛知県・名古屋市）
- ④ 山本綾、日本人と外国人の英語による初対面会話における関係性の構築 — *Japan/Japanese* (+NP) をめぐる相互行為の分析一、社会言語科学会第 35 回大会、2015 年 3 月 15 日、東京女子大学（東京都・杉並区）

〔その他〕（計 1 件）

- ① 山本綾、談話を量的・質的に分析する：言語習得とエスノメソドロロジーの観点から、昭和女子大学英語コミュニケーション学科教員学術研究会、2015 年 3 月 4 日、昭和女子大学（東京都・世田谷区）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 綾 (YAMAMOTO AYA)
昭和女子大学・人間文化学部英語コミュニケーション学科・専任講師
研究者番号：10376999

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

該当なし